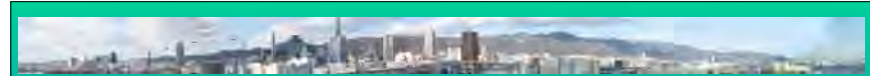


「津波等の突発大災害からの避難の課題と対策に関する研究委員会」

「避難」のスイッチ、どう入れる？

中川和之 時事通信社 解説委員

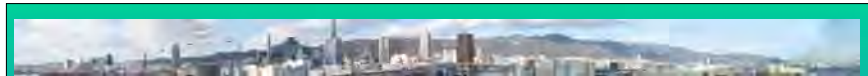


避難

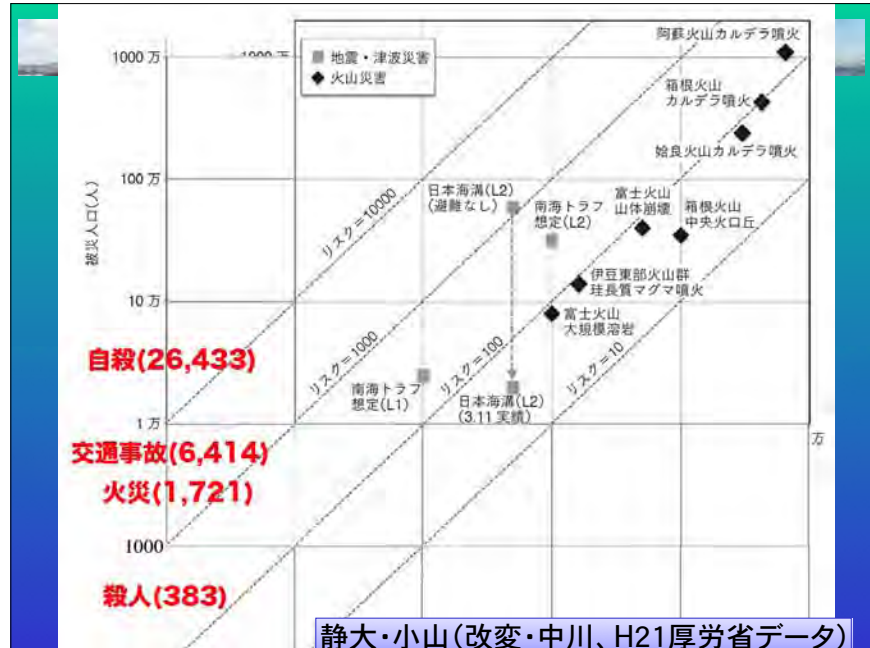
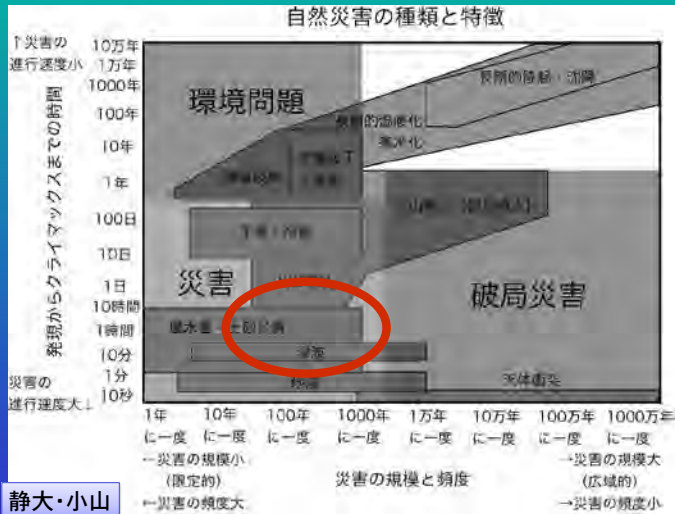
命 > 生業・財産

(生活をする避難所の話は別)

本当に命を失うと思っているか
切迫感だけがスイッチ？



どういう事態が起こりうるかの自然理解





命を守るために

- ❖ 何から逃げるのか=平時のリスコミ
 - ❖ 相手を分かっているか→ハザード理解(「大丈夫」という無理解を打破する)=理科
 - ❖ 自分を分かっているか→脆弱性理解=社会
- ❖ 逃げる切迫性があるのか=いざというときのクラコミ
 - ❖ 相手の今の状況が分かっているか→リアルタイムモニタリング=情報
 - ❖ 自分(社会)の現状を分かっているか→自己認識



東北地方太平洋沖地震

- かなり逃げたのか、逃げ足りなかったのか
 - ❖ あら探しが得意な、マスコミに振り回されてダメだったことばかり見ていないか?
 - ❖ 防災教育・啓発の成果は? 逃げ切れたのは釜石の子どもたちだけではないのでは?
 - ❖ 日中という時間帯が奏功したか?
 - ❖ さまざまな情報はどのように生きたのか?



東日本の平時のからのアラート情報

- ❖ 「想定外」と言わせないと感じた国土交通省の津波浸水想定区域看板
 - ❖ でも、道路に色を塗っていれば(by吉川)。色が塗ってあったという女川駅の階段。もっと工夫ができたかも
- ❖ 毎年塗り直していた田老の崖と、固定した看板は?。多くの石碑が何をなしたか?
- ❖ 岩手大、東北大など大学などの実践。文科省の防災教育支援事業などが、「てんでんこ」をアップデートしていたか?





1605012

9



釜石東中・イーストレスキューのプログラム

防災マップづくり

非常食炊き出し

津波記念碑清掃

群馬大学研hp

平成21年度
文部科学省 防災教育支援事業
「子どもの安全をキーワードとした津波防災」
成果報告書

平成 22 年 3 月

釜石市
釜石市教育委員会
群馬大学災害社会学研究室

釜石の報告書

専門家に委ねず、
学校の先生たちが
教材作り。(文科
省の看板が有効)

<http://www.jishin.go.jp/main/bosai/kyoiku-shien/bosai.html>

2. 各教科での地震・津波防災に関する知識の取り込み

津波防災教育を実施するための授業時間を特別に用意しなくても、各学年の教科の中には、地震・津波・防災に関連する授業の内容があります。ここでは、それらの授業単元をピックアップし、取り込みます。

2年生の算数の単元「長いものの長さと単位」
「津波の高さは、釜石湾で3mになるらしいです。では3mは何センチ？」

小学校1・2年生

| 教科 | 単元 | 津波と関連する内容 |
|----|--|--|
| 生活 | [上] みんななかよし がっこうたんけん こうていたんけん | ・学校内のいろいろな場所にいるときに地震が発生したらどうするのかを教える。 |
| | [下] なかよしひろがれ もつとまちをしりたいね みんなであつこうぼしよ みんなのためのくふう | ・避難場所や記念碑等、避難標識などをきかしてみる。 ・過去に津波がどこまできたのかを確認したり、絵地図づくりをしたりする。 |
| 算数 | [2年生] 1-4 長いものの長さたんい | ・津波の高さを用いて問題作成 「津波の高さは釜石湾で3メートルになるらしいです。では、3メートルは何センチ？」 |
| 体育 | [1・2年生] 着衣泳 | ・津波の高さを知る。 ・津波の速さと流れの強さを知る。 |

小学校3・4年生

| 教科 | 単元 | 津波と関連する内容 | |
|----|--|---|----------------------------|
| 社会 | 1 見つけてみよう わたしたちのまち 1. まちたんけんをしよう 3. ポスターや絵地図にまとめよう | ・避難場所や避難経路、石碑などの確認。 | |
| | 4 わたしたちの市はどんな所 | ・海と山にかこまれた釜石市、「おいしい魚はたくさんとれるけど、津波が来る」ということを教える。 | |
| | 5 安全なくらしとまちづくり | ・震災による火災の話から発展させて、今後釜石にも大きな地震が来ることを教える。 | |
| | 7 昔のくらしとまちづくり 1. 昔のくらし まちに残る音を調べよう | ・過去の津波による被災状況やそれを今に伝える石碑等を教える。 | |
| | 8 わたしたちの県のまちづくり 3. 県の地図を広げて | ・沿岸地域の地形やその特徴として、地震や津波が多いことを教える。 | |
| | 国語 | [3年生] たから物をさがしに | ・「津波がきたら」という題材にした作文へ発展させる。 |

**3年生の算数の単元
「時間のしくみを調べよう」**

津波の到達時間を用いて、単位の変換に関する問題を作る。「津波は何度も来るので、避難したら3時間はそのままじっとしている必要があります。では、何分でしょうか?」

地震発生から00分00秒経過

文部科学省hp

TBSテレビから

ばあちゃん「逃げなくていいよ」、
「でも逃げなくちゃ」と力入れ戸を開ける

内閣府一日前プロジェクト 東日本大震災(平成23年3月)
(釜石市 震災当時小学4年 女子)

学校から家に帰ってテレビを観ていたら、地震が来ました。家にいたのは、ばあちゃんと私の二人だけでした。

家の玄関のドアがなかなか開かなくて困ったけど、思いっきり力を入れたらガラッと戸が開いたので、ばあちゃんと一緒に避難しました。

ばあちゃんは「逃げなくていいよ」と言ったけれど、私は「逃げなきゃだめだ」と思いました。

どうしてかという、小さいころから、親に「ここは海に近いから、昔も津波がいっぱい来たんだよ」と、ウルサイほど言われていたからです。

以前は避難訓練が唯一の防災教育!

- ❖ 消防法で求められている火災時の避難誘導訓練
- ❖ 1923年の関東大震災。10万5千人の犠牲者のうち、延焼火災以外の死者は約14000人。ここから、地震=火災対策となった。

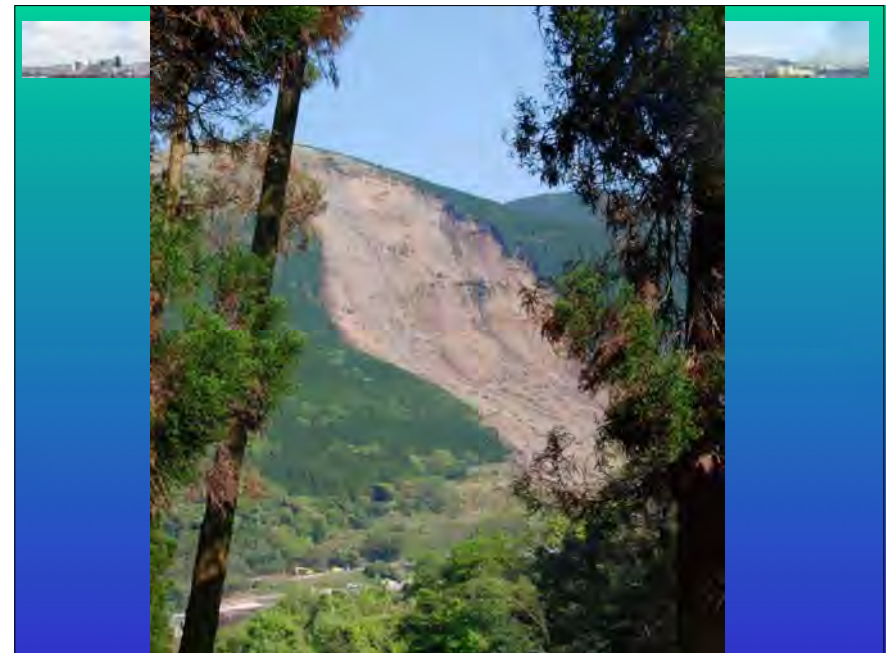


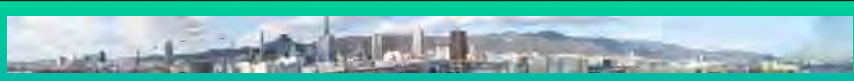
- ❖ 「怖い、危ない、逃げろ」と避けて本質を見ない防災教育

熊本地震の被災地で断層教育

「地震直後に先生の教え思い出す」

- ❖ 益城町の断層で会った女子学生「小学校時代の先生に『このあたりに断層があって、いつか地震があるかも知れない』と教わっていたことを、地震があったときに思い出した」。避難所のお世話をしていた先生談「教え子に会うたびに『先生に教わった通りだった』と言われた」。
- ❖ 立野小学校(既に併合)では、釜石と同時期の防災教育(阿蘇火山博)で、地域を作った神話と断層を総合学習で学ぶ。断層教育をしていた先生は、この他にも2人はいた(by元学芸員)
- ❖ 熊本の全小学校に配られた水の学習教材にも立野の断層。
- ❖ これらの地元の自然理解が、対処行動にどう反映したのか?





「面倒だ」をどう減らすか

- ❖ それぞれの属性から、常時発信を。年寄りにも多様な社会属性がある。それに合わせて手を変え品を変え。
- ❖ 紺屋の白袴をちゃんと反省してから＝名大。例えば耐震化、家具固定。やるべき組織がちゃんとやっているか？（内閣府2011調査、庁舎実施率市町村1割、都道府県3割）
- ❖ 大学全体巻き込み、自分事化を重ねてきた久田方式。
- ❖ 自分事化のために、ローカル事情を活かした地元ごと化を。

災害との二面性の「恩恵」とは？

「『生きる力』を育む防災教育の展開」

3 防災教育推進上の留意点 文部科学省 2013年3月

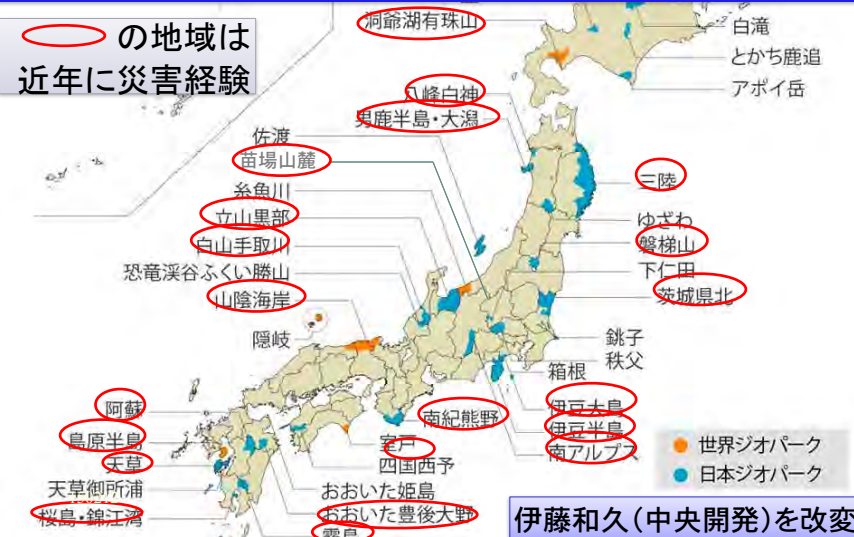
- ❖ 自然には恩恵と災害の二面性があることを児童生徒等が意識するようになることを期待したい。
- ❖ 小学校展開例8(総合的な学習の時間・高学年) わたしたちのくらしと火山「火山があることで、わたしたちはどのような恵みを受けていたでしょう。・温泉が湧いて入ることができる。・地熱を利用したエネルギーを得られる」
- ❖ 高等学校展開例2(理科・地学基礎) 日本の自然環境「国立・国定公園など自然景観や温泉等観光などに利用されている地域の特徴を探る」
- ❖ 中学校展開例2(理科・3年) 自然の恵みと災害(項目だけ)

「地震の恵みは、あとから言われても納得できない」

(1995年に神戸市で小学1年生で自身を体験、大人になっての言葉)

39地域、137市町村がジオパーク

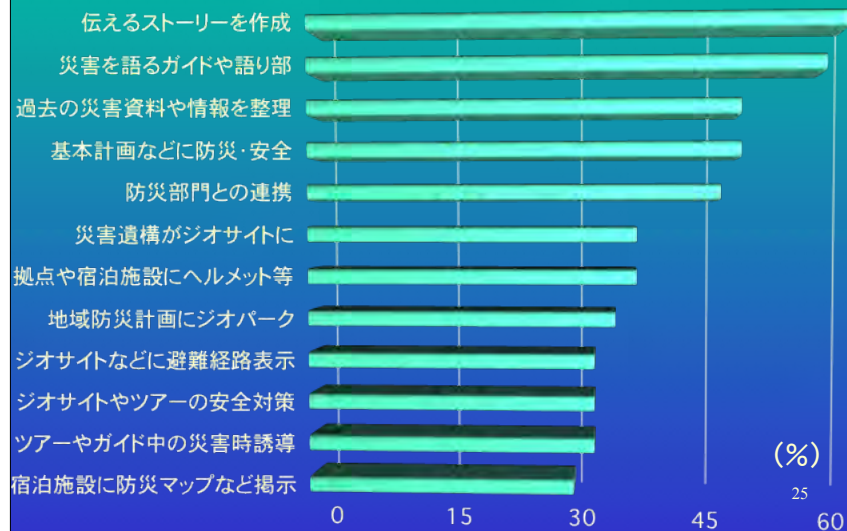
防災教育・啓発を行うのが義務!



ジオパークで災害をどう語る？

- ❖ 「**地元**に語れば**地域防災**、**外**に語れば**観光ガイド**」
2011年全国大会(洞爺湖有珠山)防災分科会の名言
- ❖ ジオの営みは、大きなマイナスを生むが、少しずつの人の力強さも産み出す。それを知ること**で**勇氣と元気が世界中に伝えられる。それが**少しの**生業になる。
- ❖ 311の津波被災地・三陸、ジオパークになって噴火した霧島、「いまも生きている」カルデラ・阿蘇、繰り返す噴火と押し寄せた土砂流・伊豆大島、災害からの復興と恵み・島原、有珠。

6割で災害伝承や語り部、災害遺構が1/3に(2014調査)

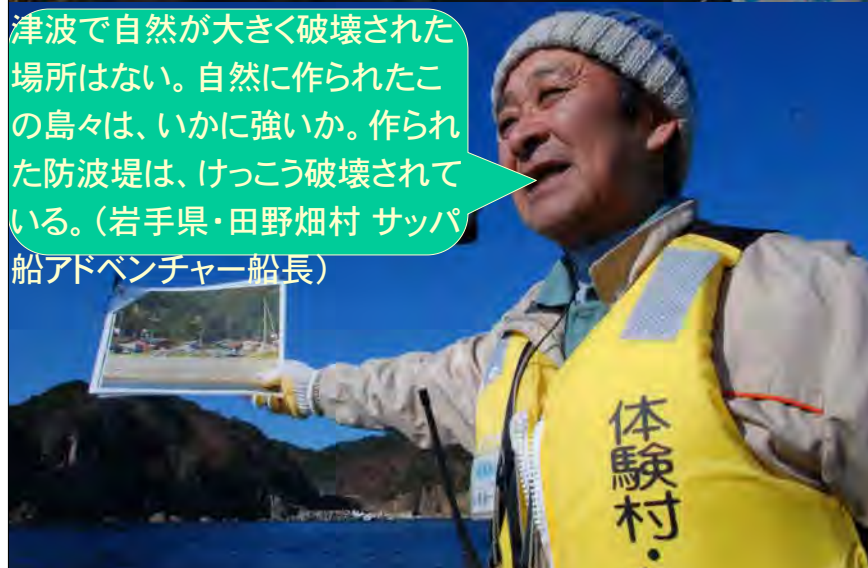


山本宮古市長
(三陸ジオパーク推進協議会長)

- ❖ この地では、津波が来る度に、これからどうするか先人たちが考えてきたが、海の幸に魅力があるので住み続けている。
 - ❖ その三陸での生き方を、この地の次世代と、他の地域の方と共有するためにジオパークをやる。これこそ三陸がやらねばならないことだ。
- (認定審査前のJGN事務局ヒヤリングに対して)

被災を誇りに変えて語るサッパ船の船長

津波で自然が大きく破壊された場所はない。自然に作られたこの島々は、いかに強いのか。作られた防波堤は、けっこう破壊されている。(岩手県・田野畑村 サッパ船アドベンチャー船長)



「海と陸が出会い大地が産まれる最前線」 次の被災地、室戸ジオパーク





ローカライズした情報の提供があったのか

- ❖ 命を守るための「緊急地震速報」を、NHKは報道。新編日本沈没の「マグニチュード7.7.2、なおも増大中」の切迫感が足りなかった？。津波警報の伝え方の限界は改善されたのか。
- ❖ 切迫性があったか。「こちらはぼうさい〇〇です。ただいま大津波警報がでております」という冗長な言い方で切迫感が伝わるか。「直ちに避難せよ」



情報でスイッチをどう入れるか

- ❖ リスクを判断できるようにするための情報とは?
 - ❖ 災害発生時には多くの切迫度の低い情報も届く。プッシュ、プル情報にも多くのラインアップが並ぶ。一方で、まだ届かない情報もある。
 - ❖ 現代社会で「情報遮断」は無理。その前提でどう対応するか。徹底して当事者へ情報を届ける
- ❖ 避難をしやすくする環境＝迅速な判断を支援する、背中から押す情報とはなにか。情報で判断を確認



どこまで進んだリアルタイムモニタリング

- ❖ リアルタイムの提供は緊急地震速報だけ?
- ❖ 今起きている地震が南海トラフの地震なのか? 連動の可能性は。最悪首都直下なのか(Mだけで分かる?)
- ❖ DONET、Snetによる津波の実測はどう伝わる
- ❖ リアルタイムモニタリングを直感的に理解させる表現方法は?
- ❖ 観測データの平時からの共有・地域理解は?



避難スイッチの前提

自分の命が大事だと思わせる社会

- ❖ 「どうせ、もうすぐ死ぬから」「面倒だ」と、どう闘うか
 - ❖ 命の客観化＝「残された子どもが、孫が」の客観化で、命の大切さを認識。自分の命だけでなく、みんなの命も大事なこと。自分の命が、「誰かの命＝生きる力」に繋がることをイメージ!
- ❖ 命を失うことの深い意味を実感させる
 - ❖ 他地域の災害への共感から得られる我が事感



難しいけど、スイッチの入れ方

- ❖ 自然の営みによって、命を守るために避難が必要になる瞬間が自分にも来るであろうことを、深く認識させるため、手を変え、品を変えて、自然災害教育・啓発・訓練・WSや社会理解
- ❖ その瞬間に、起きている事態の切迫性を納得させ、覚悟を決めてもらうためのシャワーのような情報提供。平時の訓練利用(SIPなど)

まだまだ必要な実践(防災教育、地区防災計画作り等)に即した調査研究に期待